日本風景写真協会　東京支部

支　部　だ　よ　り

2024/2/25　No.40　東京支部事務局

支部活動報告

2024年支部活動スタート

新年早々、能登半島大地震発生、羽田空港重大事故発生など、本年の先行きは予断を許さない。我々としては、できることをしっかり進めていきたい。
東京支部では、会員減が深刻であり、会員数の増大が最大の課題である。会員の皆様の知人・友人への声掛けもよろしくお願いします。

1. 東京支部2024年定期総会報告

●開催日時、会場：2024年1月28日14時～15時
　京橋プラザ区民館　　2号洋室

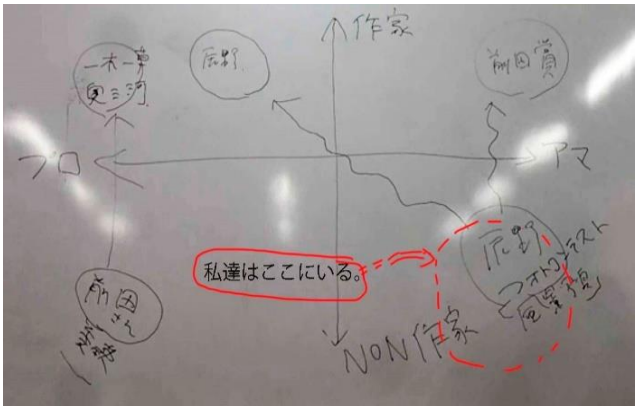
・会員総数23名出席者14名、委任状による出席者8名で会員総数の 1/3以上の成立条件を満たし、定期総会は有効に成立した。

・定期総会では、第1号議案：2023年事業報告、第2号議案:2023年会計報告並びに監査報告、第3号議案：次期支部役員案、第4号議案：2024年事業計画案、第5号議案：2024年収支予算案の5議案がすべて満場一致で承認された。

2. 新春講演会　15時～16時

永原耕治氏（隔月刊風景写真編集長）
演題：「風景写真の変遷と課題」

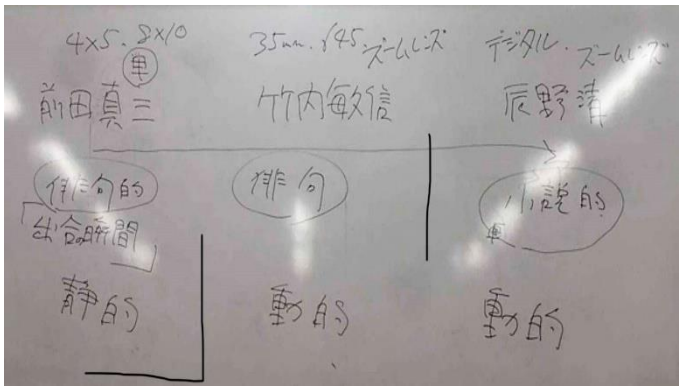
●私達はどこにいるか
プロ←→アマの軸、作家←→NON 作家の軸
前田真三さん、辰野清さんを例にとると図のようになり我々は右下にいる



●私達は何をしているのか？→「アール・ブリュット」？
フランスのジャン・デビュッフェが1940年ごろ言い始めて「生の芸術」を意味するフランス語です。 それまで芸術は高度な訓練を受けた人々 （サロンとか）のものと思われていたが、そうでない芸術もあるのだという発信。
一つは高等教育を受けていない、野生であり、なまであり、訓練を受けていない、飼いならされていない
つまり、自分の心からやりたいと思ってやっていて
ゴールまでの道筋を自分で見つけるものです。
日本の文化はもともとそちらである。
風景写真は、やりたくてやっている、お金儲けではない、まさにそれだと思う。
日本ではそういう仲間として、俳句、詩吟、能、武道、書道、華道などがある。 風景写真は、日本の芸術のど真ん中にいるといえる。
また、一人だけだと、良い写真は撮れないし、高めあってもいけない。ハイレベルな人たちが集団でいるからこそ、高みに達することができる。
コンテストに何回も入選する方が、前田真三賞に受からないのは上記図で作家性が弱いことによる。

●風景写真の歴史
明治時代、徳川慶喜、弟の昭武、 井伊、 松平氏など写真を趣味にしていた人たちが　発行した会報誌を見ると　今のフォトコンテストと全く同じで、びっくり。得点、1等、2等、3等、選者（黒田清輝（画家）、小川一真（写真家）など）、印画評。

●変遷
変遷ということにさほど意味はないと思う。それでも変遷、特徴はある。例：前田真三さん、竹内敏信さん、辰野清さん　　三者の特徴を図示する。
今、辰野さん的な写真が写真界を圧倒しているかというとそうではない。



●課題

風景写真の変遷をしりたいと思うことが課題？純粋に撮りたくて、野性の気持ち、生の気持ちで撮っている。変遷など気にせず、純粋に楽しくやっていけば、自分らしい作品が撮れると思う。

●前田真三さんの35年前のインタビュー

・アマチュアの方の写真について苦言

1. 欲張りすぎている。
2. 暗すぎる。
3. マナーが悪い人がいる。

まるで現在のコメントのようです。

3　2023年の活動を振り返って

コロナをあまり気にせず撮影活動ができるようになってきた。

●定例研究会

全4回はいずれも会場で実施できた。第1回、第2回は指導講師に萩原史郎氏を迎えて行った.。Photoshop/Bridge/CameraRaw を使って、熱意溢れる講評で素晴らしかった。残念ながら第2回研究会の翌日、急逝された。急遽、福田健太郎氏に代役をお願いし、第３回、第４回の研究会を行った。引き続き、Photoshop/Bridge/CameraRaw を使っての講評をお願いした。第3回は、初めてでもあり、講評と講演「自分を生かす、風景写真」をお願いした。丁寧な、ポイントを押さえた講評をしていただいた。なお、第3回から会場も中野から京橋地区区民館に変更となった。

●特別研究会は、7月に辰野清氏「風景写真による内面性の評価」、10月に飯島勝氏「飯島勝の世界」に講師をお願いした。辰野氏の講評、講演は素晴らしく、また、飯島氏の作品紹介は個性あふれるものであった。

●第21回支部作品展は、選定講師を山口高志氏にお願いし、11月3日～9日にかけて無事実施でき、好評であった。

●支部撮影会は、5月に「月山近辺」、10 月に「月山、鳥海山近辺」で実施した。

●関東5支部合同撮影会（指導講師：萩原史郎氏）（幹事東京支部）を4月「国営昭和記念公園」にて実施した。47人参加で盛況だった。作品コンテストも実施。

●東京支部ホームページに、故高橋清氏の個展を掲載した。

4. 2024年支部活動計画

●本年の定例研究会講師は、福田健太郎氏にお願いした。作者に寄り添った丁寧な講評を期待している。定例研究会の日程は、3月23日(土)のほか、5月、8月、12月を予定している。

●特別研究会は7月と 10 月の2回予定している。7月の講師は増井治氏にお願いした。

●第22回支部作品展は11月15日（金）～21日（木）富士フォトギャラリー銀座スペース－2で開催予定。

●なお、支部ホームページに、web 個展あるいは個人ギャラリーを設けたいので希望者を募集する。

●支部撮影会は4月後半（蓼科及び周辺桜巡り）及び秋（奥只見方面）の2回を考えている。

●5支部合同撮影会は神奈川支部幹事により3月11日（月）～12日（火）神奈川県荒崎海岸で予定している。

5　新役員

役員の一部が変更となりました。

・研究会担当：藤野治雄さん

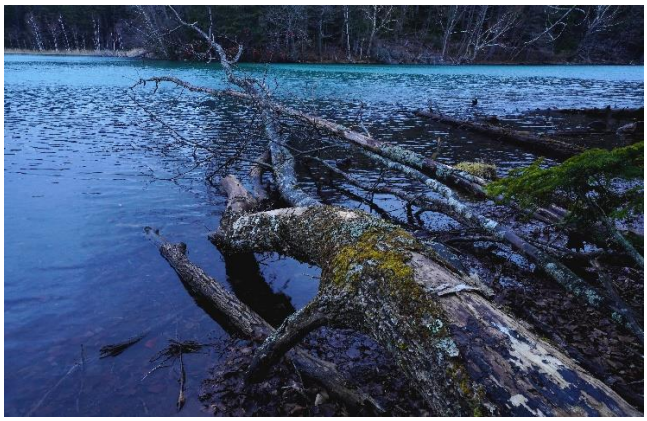
・広報担当（支部 HP）：井上武夫

活動方針・計画の詳細については総会資料第4号議案を参照いただきたい。　（文責　井上武夫）

私のお気に入り撮影地

佐々木節子さんのお気に入り撮影地について伺いました。インタビューならOKとのことで、お聞きした内容をまとめてみました。以下１人称で書いています。

私のお気に入り撮影地は北海道の湖沼です。屈斜路湖、阿寒湖、支笏湖などたくさんの湖沼がありますが、特に好きなのはオンネトーです。オンネトーは阿寒摩周国立公園内にある湖でアイヌ語で「年老いた沼」「大きな沼」の意味です。



★　輪廻転生　（オンネトー）

北海道の3大秘湖（オコタンペ湖、東雲湖、オンネトー）の1つで神秘の湖です。オンネトーは小さな湖で季節の変化、朝夕の変化が大きいのが気に入って毎年訪れています。対岸の雌阿寒岳、阿寒富士が並んで映ります。秋から冬にかけての季節が大好きです。
真冬の豊頃海岸のジュエリーアイス、美瑛の青い池なども好きな撮影地です。

★　湖面に映る星空　　（オンネトー）

私は京都の出身で、京都の箱庭的な美しさの庭園や自然に囲まれて育ちました。
40代の頃　秋田県の八幡平の広大な紅葉風景を見る機会があり、京都には見られないダイナミックな風景に強く惹かれました。
何回か撮影ツアーで行くうちに、北海道はもっと広大な場所だと聞き、是非行ってみたいと思いました。高橋真澄さんのツアーで美瑛や富良野の撮影会に何回も参加し、自分でもレンタカーを借りて撮影に行くようになりました。そのころ「旅写真」という本に撮影地案内やデータがでていて撮影のガイドブックにしていました。3回に1回は夫も一緒に泊まりがけで撮影に行ったり、行きつけの旅の宿ができ撮影地の案内をしていただいたりしました。
北海道在住の野鳥の撮影をしているご夫婦と友達になり一緒に北海道を巡るようになり、北海道には年に10回くらい行ってましたが、現在は年に5回くらいです。
夫はわたしより10歳年上ですが、70歳から75歳の5年間　秋田県の会社の社長になり単身赴任していました。私は1か月のうち1週間秋田に行き、月曜から金曜まで5日間は一人で秋田、山形などを巡り写真三昧。週末だけ夫の身の回りの世話をするという生活でした。夫は空港への送り迎えをしてくれて理解がありました。以前「二科会への道」でもお話しましたが、夫は「写真をやめないで続けてほしい」と言い残し、その言葉がずっと私の心の支えとなっています。

佐々木さんは 80 代ですが国内のみならず海外へも精力的に撮影に出かけていらっしゃいます。ご本人曰く「元気なうちに行きたい所へいっておかないとね」とのことですが、本当にエネルギーにあふれた方です。
ご健康とますますのご活躍をお祈りいたします。

（文責　戸張伸子）

写友広場

PFJ （日本写真家連盟） 四季の彩り公募展に鈴木雍人さんが PFJ 大賞、野間芳子さんが彩り賞に入賞されました。お2人の作品を紹介します。
2/12～/18　東京都美術館にて開催。

★　PFJ大賞　　「終焉」　　鈴木雍人

PFJ 大賞を受賞して

一昨年暮れ、コロナ禍がやや低減したころ、突然転倒して頭部に血腫ができました。年齢相応の成人病のため数種類の薬を内服しており、中でもいわゆる血液サラサラも服用しているため、脳外科の医師より3か月間の自宅安静を強いられました。最初の2ケ月間は楽でよかったと思っていましたが、3ケ月目になると例会に持参する作品がないのに焦りました。いくつもの葛藤がありましたが結局いろいろな緊急の準備をしながら一人で気になったところを徘徊して1ケ所のハス畑にたどりつきました。その後近くの宿泊施設を求めて翌日早朝に撮影場所に向かいました。まだ薄暗い中　たまたま

蓮の花托が集中しそこに白鳥が残していった一枚の羽根も凍り付いていましたのでそこで日の出を待ちながら『これらはもう少ししたら朽ちてゆくであろう、もしかしたら自分も同じかもしれない』と。それらに向かってその時の自分を重ね合わせて静かにシャッターを切ったものです。その中の一枚を最近やや消極的になった自分を奮起させるためにPFJに応募しましたところ入選してホッとしましたが、まさか大賞になるとは思いませんでした。PFJ会員の後輩が『渋い作品ですねー。それがかえって命を感じます』とメールしてきました。私はむしろその後輩の感性に感心しました。 標題は「終焉」です。

撮影地　茨城県小美玉市周辺

（文責　鈴木雍人）

★　　彩り賞　「水面に躍る」　　野間芳子

飯豊連峰からの雪解け水が流れ込む白川湖でこの時期にしか見ることの出来ない水没林。これを撮りたくて、昨年の JNP 東京支部の月山撮影会を終えた後白川湖へ向かいました。白川湖畔を走っていると木立の間から、水面に浮かぶように生えている若葉の緑が目に飛び込んできました。生気がみなぎる初夏の到来を感じ、喜んでいるように躍っているイメージで切り取りました。　（文責　野間芳子）

事務局より

皆様のご協力を得て支部活動を行っていくのでよろしくお願いします。

2024年の予定

★定例研究会

講師：福田健太郎氏

3月23日（土）、 5月18日（土）or19日（日）、17日（土）or18日（日）、12月21日（土）or22日（日）

★特別研究会

7月20日（土）or21日（日）（講師：増井治氏）、

10 月19日（土）or20日（日）（講師未定）

★撮影会

・関東5支部合同撮影会

3月11日（月）～12日（火）　神奈川県荒崎海岸

・支部春の撮影会

4月21日（日）～23日（火）　蓼科周辺他（桜巡り）

・支部秋の撮影会　奥只見周辺を予定

★第22回支部作品展

11月15日（金）～21日（木）

富士フォトギャラリー銀座

（文責　井上武夫）

編集後記

2024年は能登半島地震と飛行機事故で始まり不穏な幕開けでした。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。普段美しい風景写真を楽しんでいる私達にとって、牙をむく自然の猛威を見せつけられた感じがします。自然の猛威は本当に恐ろしく人間の無力さを感じました。

そんな中でも花は季節を忘れずに咲いてくれます。
奈良時代は花といえば桜ではなく梅をさしたそうです。
桜をさすようになったのは平安時代の古今集以降とされています。
「東風吹かば匂いおこせよ梅の花　あるじなしとて春な わすれそ」
菅原道真の有名な和歌です（平安時代の「大鏡」より）
無実の罪で大宰府に左遷された菅原道真が詠んだ歌で　庭の梅の花よ　東風が吹いたら風にのせて匂いを届けてほしい　主（自分）がいなくても春を忘れないでおくれ　」という意味です。無実の罪で住み慣れた我が家を離れ遠い九州の大宰府に行かねばならない無念さ悲しさをこめた歌で庭の梅の木を見て詠んだそうです。

我が家の近くの駒沢公園に小さな梅林があり、白梅、紅梅が、咲きだすととても良い香りがします。
梅の香りに包まれていると、平安時代の人々も同じように花の美しさと香りを愛でていたのかなと思います。
そう思うのは「NHK の光る君」の影響もあるかもしれま

せん。ゆっくりと散歩するカップル、お子様連れや犬の散歩をさせている人、ベンチでおしゃべりしたり、スマホで花を撮影したり、皆暖かい日差しの中で思い思いに満開の梅を楽しんでいます。私のお気に入りは白とピンクの枝垂れ梅の木。近いので毎年何回か通って楽しんでいます。

新春の永原さんの講演で「富士フイルムの100人展は万葉集だ」というお話があり、たいへん面白く思いました。万葉集は1300年も前に同じ時代に生きている様々な地域、様々な年齢の人々が心惹かれた美しい風景や自分の思いをこめて歌を詠み一つの時代を詠いあげていました。現代の100人展はその思いを写真で表現しているというのです。
「風景写真は俳句であり、辰野さんは風景写真に物語をこめている・・」
JNP からも「俳句と風景」という本が出版されています。渕江さんの作品が2点載っていて支部だよりで紹介したことがあります。1300年も前から日本人は自分の思いを俳句や歌に詠み、現代の私達はそれを写真に撮って表現しているのですね。
1300年の時の流れの中で私達日本人には同じ DNA が脈々と受け継がれているのですね。そしてこれからもその流れは続いていくのでしょう。

今年もたくさんの感動に出会い、思いをこめた素晴らしい作品をつくりたいものですね。どうぞよろしくお願いいたします。　　（文責　戸張伸子）